

イズメ

——中世末期の風俗図屏風に描かれた育児用具

齊藤 研一

はじめに

国立歴史民俗博物館所蔵の洛中洛外図屏風甲本（以下、歴博甲本と略称）の左隻第五扇、小川通から誓願寺通へ東に折れたすぐの路上に、母親であろう女性が子どもに授乳している姿が描かれている（図1）。母親は右膝を立てて座り込み、やや前かがみの姿勢で左の乳房を子どもに吸わせている。子どもは、大きな籠の中に入ったまま、顔を上げてお乳を飲んでいる。子どもが入っているこの籠がイズメであり、れっきとした育児用具なのである。

留意すべきは、このイズメが、それまでの中世絵画には見出すことができなという点であろう。十六世紀に制作された初期洛中洛外図、および同時期の制作と考えられる名所図屏風において初めて描かれる図像なのである。

はたしてイズメは、中世末期に登場した育児用具なのだろうか。これら風俗図屏風に描かれたイズメからどんなことを読み取ることができるのか、考えてみたい。¹

一 イズメとは

まず、イズメの概要について述べておこう。⁽²⁾

祖父江孝男氏らによる調査報告によれば、イズメは、島根・鳥取・広島県を西限として、東北・北陸地方を中心に東日本において広く使用されていた。⁽³⁾

本稿では「イズメ」という名称を用いるが、呼称は地方によって様々である。東北地方ではエヂコ、イジコ、イズメ、北陸地方ではツグラ、イズメ、イズミと呼ばれるほか、福井・岐阜・愛知・長野県ではツブラ、イズミ、クルミ、滋賀県ではフゴ、広島県ではエンボ、ホゴなどとも呼ばれる。ちなみに、イズメは「飯詰」のことで、飯櫃を保温のために入れる藁製の容器である飯詰の転用であるといわれたり、エヂコに「嬰兒籠」の字が当てられたりすることもある。

材質については、藁製が一般的であるが、そのほかにも、板材を箱状に組んだハコイズメや、竹材で籠状・箱状に編んだカゴイズメやタケイズメがある(図2)。また、檜製の曲物で胴を漆塗りにしたイズメや、樺、杉、桜などの樹皮をへぎとって曲げ、底は板材で碁盤目状に組んだイズメ、あるいは結補を転用したイズメなども知られる。比較的身近な素材を用いた、多様な材質のイズメが存在したよう⁽⁴⁾だ。

大きさは、藁製のイズメの場合、およそ高さ三〇〜四〇センチ、口径は五〇〜六〇センチぐらいである。子どもは、早ければ七夜の後、つまり生後七日目ぐらいから、イズメからはい出て一人で歩き始めるようになる数え年二歳頃まで、その中に入れて育てられた。しかし、実際には三、四歳頃まで使われることも多く、なかには自分でイズメに出入りする子どももいたという。

イズメの中には、子どもを尻まくりさせ、足を投げ出すか、胡座をかくような格好で座らせて入れた。そ

して、蒲団やボロ（古布）で腰の周囲を巻くように包んだり、あるいは脇に詰めるなどしたりして、座りをよくさせた。

子どもは、イズメの中に入ったまま排泄をする。イズメの底には、籾殻、糞しべ、筵、灰、モグ（藻草）などが敷き重ねられ、小便を吸収するようになっていた。子どもは、お尻に布（おしめ）をあてがうこともあるが、糞などの上に直接座らされることもあったという。その場合、モグなどは一日に数回取り替え、水洗いして乾かし、再使用されていた。

なお、イズメには持ち手が付いていることが多い。これは、持ち運びのためだけでなく、そこに帯などを通して子どもの肩に掛け、イズメからはい出ないよう縛り押さえるためのフックのように使用するものでもあった（図3）。

こうしたイズメが、主に農村において広く使われ、東北地方では、昭和三十年代頃まで普通に使用されていたことが知られる¹⁾。

重要なことは、イズメが必要とされた生活条件であろう。イズメに入れられた子どもは、日中、台所や寝間などに一人放置されることが多かった。母親をはじめ、家族は農作業のために出払ってしまうからだ。そして母親は、イズメの子どもに乳を与えるため、農作業の合間に何度か家に戻った。時には、イズメを田畑まで持っていく、目の届くところに置いておくこともあったようだ。

つまり、母親が農作業に従事して子守をすることができず、また、その母親の代りに子守をする家族もない（祖父母も農作業に従事していたり、年長の兄弟もいなかったり）といった状況において使用された育児用具が、イズメなのである。

子どもにとっては拘束用具ともいえるイズメだが、子守をしている余裕のない母親にとっては、子どもが

どこかに行ってしまったたり、危ないものに手を出したりしないよう、危険防止のための安全器具という意味があった。^②

よって、母親が家に居ても家事で手が離せないような時には、子どもはイズメの中に入れて入れた。イズメは、揺り籠のように使われることもあった。イズメの下に「ゴロンボ」と呼ばれる木の棒や火吹竹などを差し入れて、揺さぶりあやしたほか、最初から揺さぶりやすいように、底を鍋底状にふくらませて作ったイズメもある。また、イズメを梁から吊るしてぶら下げ、揺り動かして使用することもあった。

つまりイズメは、日常的に子守をすることができない生活条件・家族環境が生み出した、手軽な育児用具なのである。^③

二 初期洛中洛外図に描かれたイズメ

さて、十六世紀に制作された初期洛中洛外図には、このイズメの描写が計八か所に見られる。歴博甲本に二か所、東京国立博物館所蔵模本（以下、東博模本と略称）に三か所、そして米沢市上杉博物館所蔵本（以下、上杉本と略称）に三か所である。^④ それぞれの描写に番号を付し、以下、その番号によって述べていきたい（表参照）。

イズメ①は、土御門通と正親町通との間、室町通りの路上に置かれているもので、傍らに立つ幼い子どもが、イズメの子どもの相手をしている（図4）。子どもと比べてイズメの口径が広く、ちょこんと入っているといった様相である。

イズメ②は、冒頭で紹介した場面である（図1）。

イズメ③は、北小路の北、堀川に面して建つ店棚の入口に置かれている(図5)。子どもは、前髪だけを剃り残した髪型をしているようだ。顔は隠れて見えませんが、店内で店番をしている人が、子どもの親であろうか。

イズメ④は、「西京」と思われる構えを築いた村落の木戸をくぐった右側、藁葺屋根の家の前の路上に置かれている(図6)。

イズメ⑤は、小川通の東、一条通の北にある町屋の裏庭に描かれるもので、母親であろう女性が、今まさにイズメの子どもにお乳を与えようとしている(図7)。女性の姿勢など、図像としてはイズメ②に酷似する。

イズメ⑥は、粟田口の木戸をくぐった、藁葺屋根の家の前の路上に描かれているもので、イズメ②・⑤と同様、授乳している場面と思われる(図8)。ほかのイズメの子どもと異なり、この子どもだけは衣服を着ておらず、裸のように見える。生まれて間もない子どもなのだろうか。

イズメ⑦は、深泥ヶ池畔の鞍馬口の木戸をくぐった、やはり藁葺屋根の家の前に置かれている(図9)。イズメ①と同様に、傍らの子どもがイズメの子どもの相手をしているようだ。

イズメ⑧は、禅昌院の北側の扉際の路上に描かれる(図10)。背後に立つ女性が母親であろうか。イズメ③と同様、子どもは前髪を剃り残した髪型で、右手をイズメの外に出しているように見える。ちなみに道の北側の家は、藁葺屋根の家である。

初期洛中洛外図に描かれているイズメは、以上の八つである。これらのイズメが描かれていた場所については、諸本(歴博甲本・東博模本・上杉本)に共通する特定の場所というものはなく、それぞれの場所とイズメについても、今のところ固有の関連(その場所にイズメが描かれなければならない必然性)は確認でき



図4 イズメ① 歴博甲本 (右隻第5扇)



図1 イズメ② 歴博甲本 (左隻第5扇)



図5 イズメ③ 東博模本 (左隻第4扇)

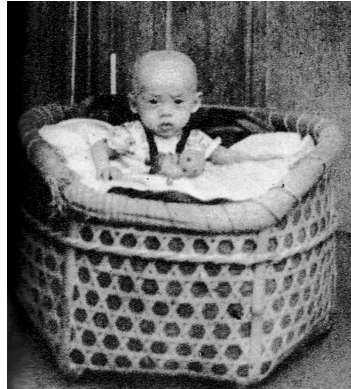


図2 竹製のイズメ

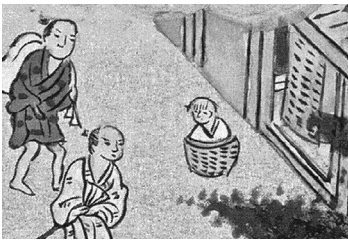


図6 イズメ④ 東博模本 (左隻第5扇)



図3 紐で固定された子ども



図7 イズメ⑤ 東博模本 (左隻第5扇)

表 初期洛中洛外図屏風に描かれた「イズメ」

	イズメ	隻	扇	描かれている場所		傍らにいる人	
図4	①	歴博甲本	右	5	室町通り	路上	子ども
図1	②	〃	左	5	誓願寺辻子	路上	女性 授乳
図5	③	東博模本	左	4	堀川	入口前	—
図6	④	〃	左	5	西京の集落	入口前	—
図7	⑤	〃	左	5	一条通り北側	裏庭	女性 授乳の姿勢
図8	⑥	上杉本	右	3	粟田口の集落	路上	女性 授乳
図9	⑦	〃	左	1	鞍馬口の集落	路上	子ども
図10	⑧	〃	左	2	禅昌院の塀脇	路上	女性
—	—	歴博乙本	—	—			



図10 イズメ⑧ 上杉本
(左隻第2扇)



図8 イズメ⑥ 上杉本 (右隻第3扇)



図9 イズメ⑦ 上杉本 (左隻第1扇)

ない。画面の季節表現とイズメとの関わりも、特にないようである。

全体の描写数が少ないので何ともいえないが、洛外の描写が二つ（イズメ⑥・⑦）あり、ともに上杉本で、同じように京の七口を出た地点に描いていることには、何か意味があるかもしれない。

八つのイズメは、いずれも屋外に置かれている。洛中洛外図の俯瞰した構図上、部屋の内には置かれたイズメを描くことはできない。そこで、イズメを「見せるため」に、故意に屋外に描いたとも理解できる。しかしながら、前述したように、イズメは農作業をしている場所の近くなど、親の目の届く屋外に置かれて使用されることもあったことをふまえれば、町屋の入口脇に置かれ、道行く人々にも見られるような状態で使用されたとしても、おかしくはないだろう。

次に、イズメの傍らにいる人物については、母親であろう女性が描かれているのは自然なこととして、留意すべきは、二つの場面（イズメ①・⑦）に見える子どもたちの姿である。イズメの子どもにちよっかいを出しているだけかもしれないが、親に代わって子守をしている年長の子どもの姿と想定することも可能だろう。少なくともイズメの傍らに、大人の男性（父親）の姿はない。

八つの場面のうち、三つは授乳の場面（イズメ②・⑤・⑥）である。いずれも構図が似ている。そもそも、イズメに子どもを入れたまま授乳する姿勢に不自然さはないのだろうか。

子どもを胸に抱いて授乳する女性像は、しばしば中世の絵巻に点景として描写されるものであり、少なくとも狩野派においては粉本化されている⁹⁾。例えばイズメ②（図1）は、伝狩野元信筆『酒飯論絵巻』（文化庁蔵）に描かれている授乳する女性の図像（図11）と酷似する¹⁰⁾。イズメの子どもに授乳する様子は、図像の転用による現実離れた光景でありはしないだろうか。

実は、イズメの子どもに授乳する時は、子どもをイズメから出さずに、そのまま授乳することもあった。

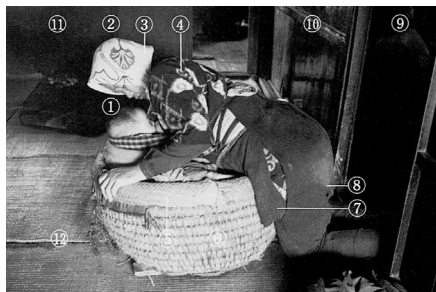


図12 イズメに入れたままでの授乳



図11 『酒飯論絵巻』(文化庁所蔵)

母親が、(A)両膝を折って腰を伸ばして授乳する方法(この姿勢を奥能登地方では「エンツクバイ」という)と、(B)正座してイズメの縁につかまり、寄りかかって授乳する方法とがあるという¹¹⁾。子どもをイズメに入れたまま授乳する様子は、実際に存在した光景なのである。

前者(A)の姿勢が、図12になるだろうか。母親が、イズメに入った子どもに覆いかぶさるようにして授乳している。後者(B)の方法は、仕事に疲れた母親にとって、一時の休息の姿勢であったともいわれる。藁製のイズメには、手前の縁が低くなっているものがあるが、これは、子どもをイズメに入れたまま授乳しやすいように作られた工夫なのだそうだ。

初期洛中洛外図に描かれたイズメの授乳の様子は、強いて言うなら後者(B)に近く、一般的な授乳の画像・構図をふまえても、現実により得た姿勢を描いていると判断しておきたい(実際には、イズメの子どもは、ほぼ後ろ向きの姿になるであろう)。

また、路上での授乳については、「見せるため」という表現上の作為であったとしてもなお、町屋の裏庭はいまでもなく、人の行き交う店棚の入口前であっても、人目を憚ることなく授乳が行われることは、何ら不思議なことではない。それは、かつての近代日本

の社会においても、しばしば見られた光景だったはずだ。

三 イズメの中のかぐや姫

イズメの起源について考える時、興味深い事例がある。図13を見てみよう。竹籠に入った一人の少女が描かれている。少女と竹籠との隙間には白い布が詰められており、見た目には、明らかにイズメに入れられた子どもである。この少女は、かぐや姫である。

『竹取物語』は、『源氏物語』「絵合」の巻において「物語の出で来はじめの親」ともよばれ、すでに平安中期には絵巻としても成立していたと考えられている。しかしながら、現存する最古の完本は、時代を大きく降った天正二十年（一五九二）書写の天理大学図書館本（武藤本）であり、奈良絵本や絵巻など、絵入りの作品ともなると、いずれも十七世紀以降の近世に制作された作品しか伝わらない。¹²

天理大学図書館本の本文によれば、竹の中に三寸ばかりの小さな子どもを見つけた竹取の翁は、その子どもを家に連れて帰り、妻に預け、とても小さいので「こ（籠）に入れて」育てたとある。図13は、竹取の翁夫婦に大切に育てられている、かぐや姫の様子なのである。¹³

かぐや姫が入っていた「こ（籠）」をイズメであると指摘したのは、菅江真澄（一七五四〜一八二九）である。天明二年（一七八二）に木曾路から歩き始め、同六年（一七八六）まで東北地方を周遊した際の写生帳『粉本稿』には、真澄が描いたイズメのスケッチと文章が書き残されている（図14）。

わらはをやしなふに、しなのにてはいちめ、くるみ桶、みちのおくにていちこといふものにいれぬ、是



図15『竹取物語絵巻』上巻
(諏訪市博物館所蔵)



図13『竹取物語絵巻』上巻
(東京大学所蔵)



図14 菅江真澄『粉本稿』(大館市立栗盛記念図書館所蔵)

は竹取物語にいふ、いとをさなければ、はこに入れてやしなふ、又一本に、いとをさなければ、こに入れてやしなふとありも、かゝることにや、（*私的に読点を付した）

十八世紀後半に、イズメが信濃地方では「いちめ」あるいは「くるみ桶」、東北地方では「いちこ」とそれぞれ呼ばれていたことがわかる。スケッチには、何重にも布にくるまれた子どもが、頑丈そうに編まれたイズメの中に入っている様子が描かれている。イズメの下には三本の丸い木の棒が敷かれており、前述したように、イズメを揺り動かすためのものであろう。

なお写生帳には、イズメのスケッチとともに、子どもがおしっこをして濡らした衣類を、囲炉裏の上に組んだ「八足」に覆い掛けて乾かす様子も描き添えられている。

『竹取物語』に戻ろう。かぐや姫がどんな容器に入れて育てられたのかという点について、諸本の詞書を比較してみると、「こ（籠）に入れて養う」のほか、「はこ（箱）に入れて養う」、「てはこ（手箱）に入れて養う」という異同がある。一方、絵巻をはじめとする絵入り諸本の当該場面を見てみると、かぐや姫が、①竹籠に入っているもの（図13）、②小さな箱に入っているもの（図15）、③塗桶に入っているもの、④容器には入らず座敷に座るもの（やや成長した時点の姿か）、とに分類することができる¹⁴。

このように、かぐや姫が入る容器は様々に描かれるが、実際にハコイズメや桶型のイズメが存在したことをふまえるならば、描かれたこれらの容器もまた、イズメとみなすことができる。絵画化された近世のかぐや姫は、イズメに入れて育てられた子どもとして描かれているのである。

イズメの起源について考えたとき、かぐや姫の事例は示唆的である。「野山なる竹をとりて、よろづの事」に使っていた竹取の翁にとって、竹籠は常に身近に存在する生活用具である。年老いた夫婦が、子育ての一



図16 『遊行上人縁起絵巻』巻3

(Image: TNM Image Archives)

助として竹籠を活用することは、ごく自然な成り行きであつたらう。イズメの起源は、案外、このようなものだったのではないだろうか。つまり、籠を育児用具として利用することは、自然発生的ともいえることであつて、イズメの起源はかなり遡るのではないかとということだ。

例えば、次のような描写が参考になるだろうか。『遊行上人縁起絵』巻三第一段には、尾張国甚目寺で行われた施行の様子が描かれている。諸本によって図様に差異が見られる場面ではあるが、東京国立博物館所蔵本⁽¹⁵⁾には、施しを受ける乞食・非人の輪の中に、女性と子どもの姿が見える(図16)。

子どもは、地面に置かれた籠の中に入れられ、顔だけを外に出し、傍らに座る母親であろう女性から食事を与えられている。この籠には脚が付いており、笈であることがわかる。たまたま食事をする際に子どもを笈の中に入れてただけかもしれないが、日常的に笈に入れて連れ歩いていたとも考えられるだろう。

籠状の容器は、いつでも育児用具に成り得るのだ。

四 イズメのある社会

冒頭で述べたように、イズメは、十六世紀に制作された風俗図屏風において初めて描かれる。イズメの起源が時代を大きく遡るのであれば、では、なぜイズメは中世絵画に見出すことができないのか。幼い子ども

をおんぶした母子の姿や、授乳の場面が数多く描かれていながら、イズメを描くことだけが排除されたとは考えにくい。

これは推測でしかないが、イズメがイズメとして、つまり、例えば生活用具である籠の二次的な利用ではなく、固有の育児用具として成立し、急速に普及し始めたのが、中世末期の十六世紀だったのではないだろうか。とくに初期洛中洛外図に描かれたイズメは、洛中洛外図という新しいイメージ・ジャンルの成立とあいまって、そうした社会の動向を敏感に反映して描き込まれた図像なのではなからうか。

いずれにせよ確かなことは、十六世紀には、少なくとも京都近郊においてイズメが存在し、そして、イズメを必要とする社会が成立していたということである。

前述したように、イズメの使用は、家族の中に子守をする人手が存在しないことに起因した。直接的には、母親が農作業などに従事し、子守をしている時間を確保できないという状況があった。つまり、初期洛中洛外図に描かれたイズメは、十六世紀の京都およびその近郊において、母親が多くの時間を何らかの労働に費やさなければならぬ状況があったことを示すのである。それまでの中世社会よりも、女性（母親）が担う労働の役割の重要性が増した、あるいは増しつづかったことを意味しよう。⁽¹⁶⁾

近世後期を対象とした考察ではあるが、墮胎や間引きが行われた動機の一つに、家族農耕における労働力の確保があったことが指摘される。⁽¹⁷⁾ 言うまでもなく、出産・育児による女性の労働力の損失が問題となっているのだ。育児の在り方は、家族の、とくに女性（母親）の労働の問題と、密接不可分の関係にあることを忘れてはならない。

その意味で興味深いのが、太田記念美術館所蔵「洛外名所図屏風」(六曲一双)と国立歴史民俗博物館所蔵「東山名所図屏風」(六曲一隻)に描かれたイズメである。初期洛中洛外図と同じ十六世紀の成立で、両

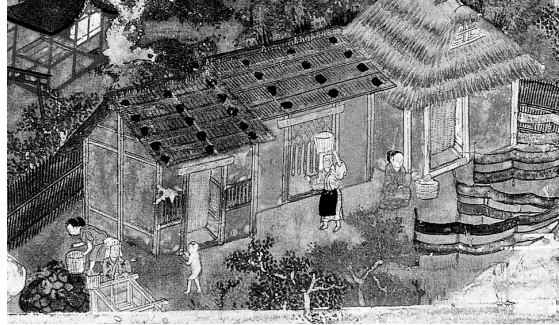


図17 「東山名所図屏風」 第6扇

(国立歴史民俗博物館所蔵)

作品には共通の粉本の存在が推測されており、イズメが描かれている四条河原の場面についても、両者の図様は酷似している。¹⁸⁾

後者の国立歴史民俗博物館所蔵「東山名所図屏風」を見てみよう(図17)。鴨川の西岸に三軒の家が建ち並び、河原近くには布が干され、女性ばかり四人と、子どもの姿が描かれている。①イズメに入った子どもと、その傍らにしゃがむ、おそらく母親であろう女性、②黒い前掛けを着け、桶を頭に載せた女性、③裸の子ども、④井戸端で水汲みをする女性、⑤井戸の傍らの石敷きの場所で、足もとに置かれた桶に手を差し伸べる女性である。イズメは家の前の屋外に置かれており、中の子どもは、白い布にくるまれているようだ。¹⁹⁾

下坂守氏の考察によれば、この場面に描かれているのは、「生葉染め」によって藍染めをする青屋の作業風景であり、女性たちは河原者であるという。そして、女性と子どもだけが描かれていることについては、「青屋が女性の職業であったことがその理由の一つと考えられる」と指摘している。²⁰⁾

京都という都市の急激な発展とともに、これまでになく忙しく働く青屋の女性(母親)たちの姿を描いているとしたのなら、イズメのある風景として、実にふさわしいといえるだろう。

都市における女性労働という視点から、もう一つイズメの図像を紹介したい。十七世紀初期の成立とされる静嘉堂文庫美術館所蔵「四条河原遊楽図屏風」(二曲一双)の左隻に描かれた、茶屋に置かれているイズ



図18 「四条河原遊楽図屏風」左隻
(静嘉堂文庫美術館イメージアーカイブ/DNPartcom)

メである(図18)。

白い着物を着た子どもが布にくるまれてイズメに入っており、左手の親指をしゃぶっているような仕草をしている。手前で豎杵を搗く赤い前垂れをした女性が母親で、茶を点てているのは、手伝いをしている年長の子どもであろうか。建物がほば片流れの屋根であることをふまえると、この場所における茶店としての営業は恒常的であつても、居住場所ではなさそうである。

住居は他所にあり、日々、この河原の店舗に通つて茶屋を営んでいるとするならば、子どもは毎日ここに連れて来られ、母親が仕事をしている間、ずっとイズメに入れられている。そのような状況が浮かんでこよう。

東博模本に描かれているイズメ③(図5)は、店棚の入口前に置かれていた。店の中に居る人は、子ども母親であろうか。ならば、ここにも働く母親(女性)の姿を見てとることができる。

イズメは農村で使用されていた印象が強いが、決して農家に使用が限られたわけではないだろう。十六世紀の京都という、都市の光景の中にもイズメが存在していたことには、十分に注意してよいと思われる。

先に本稿では、女性の労働力の重要性が増すとともに、イズメが十六世紀に急速に普及し始めたのではないかと推測したが、中世末期の社会において、イズメの普及は、農村よりもむしろ都市部において、より顕

著だった可能性はないだろうか。

子育てのあり方は、いつの時代にあっても、とくに母親である女性と、さらには社会の様相と密接に関わっている。初期洛中洛外図をはじめとする風俗図屏風に描かれたイズメの図像は、実にささやかな描写ではあるが、その意味するところは、とても大きいと考える。

おわりに

重要な問題が二つ、未解決のままであることに触れておかななくてはならない。

一つ目の問題は、初期洛中洛外図などに描かれているイズメが、当時、何と呼ばれていたのかということである。

イズメの呼称の一つに「いずみ」がある。『日本国語大辞典』（小学館）の「いずみ【籬】」の項には、

〔「飯話」の意か〕乳児を入れて眠らせるかご。いずめ。いずみき。揺籃（ようらん）。

とある。続けて『書言字考節用集』（元禄十一年（一六九八）序・享保二年（一七二七）刊）巻七・器材にある記載を引用している。

「籬」イヅメ
「字彙」竹器以息イヅメ「小兒」者



図19 「扇面散・農村風俗図屏風」
左隻（泉屋博古館所蔵）

「籩」という漢字に「イヅミ」の読みが当てられており、イヅメを指す語句として確認できる早い例である。⁽¹⁾

また、前掲した十八世紀後半に書かれた菅江真澄『粉本稿』には、「いちめ」「くるみ桶」「いちこ」の名称が見えた。

そして、十九世紀初め頃の成立とされる国語辞書『俚諺集覧』には、「つぐら」が立項されており、

今越後信濃のあたり嬰兒を入れる、藁にて作たる物をつぐらと云、大きき二尺斗、底に丸竹を渡し着て左右に動き敬やうに作るなり、西土にて坐車とも坐籃とも云もの也。

とある。新潟・長野県地方で藁製のイヅメが「つぐら」と呼ばれていたことや、イヅメの下に竹筒を入れ、

揺らして使用したことなどもわかる。

しかしながら、中世末期～近世初期においてイヅメが何と呼ばれていたのか、今のところ確認できていない。⁽²⁾

二つ目の問題は、イヅメの図像が、近世の風俗画に引き継がれることなく消えてしまうことである。精査できたわけではないが、例えば近世の洛中洛外図にイヅメは描かれていないようである。

十七世紀前半の制作とされる泉屋博古館所蔵「扇面

散・農村風俗図屏風」(四曲一双)の左隻に、農家の夕顔柵の前で、上半身裸の女性が、イズメに入っている子どもに乳を与えている様子が描かれている(図19)。そのほかに管見では、江戸時代後期の伝円山応瑞筆「四季耕作図襖絵」(泉涌寺所蔵)に描かれたイズメに入った子どもを確認しているに過ぎない。⁽²³⁾

そして、イズメの問題には続きがある(だろうと考えている)。捨て子を誠める近世の教諭書や、捨て子が描かれた読本の挿絵などを見ると、捨て子は籠に入れて捨てられている。見た目では、その籠はイズメとほとんど区別がつかない。捨て子が蜜柑籠に入れて捨てられることが多かったことから、「蜜柑籠」は捨て子の異称であったという。育児用具であるイズメと捨て子の容器とは、表裏一体なのであろうか。⁽²⁴⁾ 稿を改めて考えてみたい。

注

(1) イズメの画像について、〈子ども史〉の視点から最初に見解を述べたのは、黒田日出男氏ではないだろうか。黒田氏は、子どもによる「子守り労働」との関連で、イズメの画像の登場は「大人たちの『労働』の仕方や性別・老若の分業や社会的分業における大きな変動・変化」を「象徴的に示す可能性があると思われる」と指摘した(黒田日出男『絵巻』子どもの登場)河出書房新社、一九八九年)。小稿は、黒田氏の指摘に示唆を受けている。

(2) 事典の項目や展覧会図録の解説などを除くと、主に以下の文献を参照した。

柳田國男「つぐら児の心」「村の生活史を語る 日本の摇篮イズメの話」(『柳田國男全集』29、筑摩書房、二〇〇二年)。初出はいずれも一九三四年)、宮本常一「子どもをまもるもの」(『宮本常一著作集』8 日本の子供たち・海をひらいた人びと)未来社、一九六九年。初出は一九五七年)、祖父江孝男・須江ひろ子・村上泰治「エジコに関する文化人類学的研究―分布及地域的変異について―」(『人類学雑誌』六六―二、一九五七年)、祖父江孝男「エジコについて―その分布と人類学的意義―」(『小児科診療』二二―七、一九五八年)、須江ひろ子「エジコに関する文化人類学的研究―宮城県のエジコ使用地域における調査―」(『人類学雑誌』六六―三、一九五八年)、須江ひろ子「日本における育児様式の研究―長野県村の育児様式に就いて―」(『民族学研

- 究」二四―三、一九六〇年)、大藤ゆき「イヅミと子守」(「児やらい」岩崎美術社、一九六七年)、天野武「ツッ
 ラ(育児民具)の呪術性―加賀・能登の場合―」(「民具マンスリー」五一五・六、一九七二年)、天野武「産育習
 俗の側面―加賀・能登の育児民具の場合―」(「日本民俗学」九三、一九七四年)、原ひろ子「我妻洋」(「乳児期
 の養育担当者」と「エジコ」)「ふおるく叢書1・しつけ」弘文堂、一九七四年)、柳田國男・橋浦泰雄「イヅミ・
 コビタナ」(『産育習俗語彙』国書刊行会、一九七五年)、直江広治「農民の子(一)」(石川松太郎・直江広治編
 『日本子どもの歴史3 武士の子・庶民の子(上)』第一法規出版、一九七七年)、徳永幾久「産育に関する生活史
 的研究1―山形県における明治・大正期のいづめについて―」(『農村文化論集年報』一、一九七八年)、小泉和子
 「いずみ・ゆりかご」(『日本史小百科 家具』東京堂出版、一九八〇年)、小泉和子「道具が語る生活史4・いず
 み」(『週刊朝日百科 日本の歴史34 宇宙と人類の誕生』朝日新聞社、一九八六年)、横山浩司「つぐらのこと」
 (『子育ての社会史』勁草書房、一九八六年)、シンポジウム記録「子育てをめぐる諸問題」(『北陸の民俗』五、
 一九八八年)、齋藤たま「産育とわら」(『わらの民俗誌』論創社、二〇一二年)、阿部和子ほか「近現代日本にお
 ける育児行為と育児用品にみられる子育ての変化に関する一考察」(『人間生活文化研究』二四、二〇一四)。
- (3) 前掲註(2) 祖父江・須江・村上「エジコに関する文化人類学的研究―分布及地域的変異について―」。また、
 前掲註(2) シンポジウム記録「子育てをめぐる諸問題」における天野武氏の発言によれば、イヅメに類する用
 具は宮崎県ぐらゐまで分布しており、南方にも揺籠のようなものがあるという。
- (4) 宮崎清「ワラの生活用具」(『図説・菓の文化』法政大学出版局、一九九五年)には、様々なデザインをした菓製
 のイヅメのスケッチが掲載される。また、石川県立歴史博物館編「祈り・忌み・祝い―加賀・能登の人生儀礼
 ―」(『展覧会図録、一九九三年』)には、杉材のハコイヅメとクレイヅメ(結桶型)のほか、樺の生木の皮を剥ぎ
 取って乾燥させた曲物型のケヤキカワイヅメなどが紹介されている。埼玉県立博物館編「子育ての原風景―カミ
 の子からムラの子へ―」(『展覧会図録、一九九四年』)も参照。
- (5) 現在は、主に東北地方や新潟県地方の民芸品としてイヅメを偲ぶことができる。イヅメに入った子ども姿をデ
 ザインしたもので、山形県庄内地方の「いづめこ人形」がよく知られるほか、こけしや土人形などもある。
- (6) 子どものお下半身をすっぽりと埋めてしまうイヅメは、防寒対策としても利便があり、寒い時には頭の上から布を
 被せくもめてしまうこともあった。

- (7) イズメの弊害についても目を向けなければならない。身動きできないイズメの子どもは、種々の受難にもあってきたようで、母乳の匂いのためか蠅にたかれたり、時にはネズミにかじられることもあったという。さらに、日の当たらない場所に長時間一人で放置されることから、くる病の原因とされたり、パーソナリテイの形成への影響が指摘されたり、また、発育への影響、直接的には歩行開始時期の遅れなど、医学的な見地からも問題視された。とくに長い間イズメが使われ続けた東北地方の農村部では、保健・医療問題の焦点の一つに取り上げられ、子育てにおけるイズメ使用の是非が問われた。
- 菊地浩「嬰兒籠と育児」(『助産婦雑誌』一六、一九五二年)、同「嬰兒籠の乳幼児発育に及ぼす影響」(『公衆衛生』二二、一九五二年)、大牟羅良「岩手の赤ちゃんたちの生活史 エジコ(嬰兒籠)の中で三カ年」(『岩手の保健』四五、一九五六年)、村上泰治「東北日本の育児様式とパーソナリテイ」(『年報社会心理学』二、一九六一年)、吉長真子「戦後岩手の農村保健運動における乳幼児死亡問題と嬰兒籠」(『岩手の保健』誌の分析から) (『東京大学大学院教育学研究科教育学研究室研究紀要』三〇、二〇〇四年) ほか参照。
- (8) 初期洛中洛外図は四点存在するが、国立歴史民俗博物館所蔵乙本にイズメの描写はない。
- (9) 榊原悟「日本絵画の見方」(角川選書、二〇〇四年)。佐野みどり「絵巻に見る風俗表現の意味と機能」(『風流造形物語』スカイドア、一九九七年。初出は一九九一年)も参照。なお、子どもに授乳する女性の図像は、母子の姿としての象徴的な意味合いをもつと考える。
- (10) 歴博甲本と『酒飯論絵巻』(文化庁蔵)の制作年代は、同じ十六世紀前半とされる。同絵巻の図様が狩野派以外の絵師の作品にも踏襲されていることが指摘されるが(並木誠士「日本絵画の転換点酒飯論絵巻」昭和堂、二〇一七年)、図1と図11の影響関係については未考。
- (11) 前掲註(2)天野「産育習俗の一側面―加賀・能登の育児民具の場合―」。
- (12) 徳田進「竹取物語絵巻の系譜的研究」(桜楓社、一九七八年)、中野幸一編「奈良絵本絵巻集1・竹取物語」(早稲田大学出版部、一九八七年)、曾根誠一「『竹取物語』の絵画の世界」(曾根誠一ほか編『竹取物語の新世界』武蔵野書院、二〇一五年)など参照。
- (13) 東京大学所蔵本、江戸時代前期。慶安二年(一六四九)に土佐広道・広澄(住吉如慶・具慶父子)が絵を描いたとする識語があるが、疑問視されている。上原作和ほか編『かぐや姫と絵巻の世界』(武蔵野書院、二〇一二年)

参照。

- (14) 磯部祥子「竹取物語総説」、同「竹取物語絵巻」各作品解説(国文学研究資料館・The Chester Beatty Library 共編『チェスター・ビーター・ライブラリー 絵巻絵本解題目録』勉誠出版、二〇〇二年)、曾根誠一「元禄五年絵入版本『竹取物語』第一回「かぐや姫の養育」を読む」(『花園大学文学部研究紀要』四四、二〇〇二年)参照。
- 「こ(籠)」と「はこ(箱)」の差異は、本文に「いとをさなければ、こに入れてやしなふ」とあり、直前の「は」に引かれて「はこ」という理解が生じたと考えられる。なお、東京大学所蔵本の本文には「はこ」とあり、絵の描写とは一致しない。
- (15) 江戸時代後期に狩野養信一門によって制作された模本。鎌倉時代後期成立の原本の模本(『藤沢道場古縁起』)を、さらに忠実に写した作品とされる。
- (16) 長島淳子「近世の農業労働とジェンダー」(黒田弘子・長野ひろ子編『エスニシティ・ジェンダーからみる日本の歴史』吉川弘文館、二〇〇二年)ほか参照。
- (17) 太田素子「家族農耕と少子化への意志の発生―会津藩産子養育制度関係史料を手がかりに―」(『比較家族史学会編』『比較家族史研究』第九号、一九九四年)、同「子宝と子返し―近世農村の家族生活と子育て―」(藤原書店、二〇〇七年)、大藤修「小経営・家・共同体」(歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第六巻・近世社会論』東京大学出版会、二〇〇五年)、長島淳子「小農の「家」経営と子どもの養育」(『歴史評論』六八四、二〇〇七年)ほか参照。
- (18) 京都文化博物館編『京を描く―洛中洛外図の時代―』(『展覧会図録』、二〇一五年)の作品解説を参照。
- (19) 当該場面については、拙稿「絵画史料から女性労働を読む」(総合女性史学会ほか編『女性労働の日本史』勉誠出版、二〇一九年)でも触れた。なお太田記念美術館所蔵「洛外名所図屏風」の場面には、「四てうのあおや(四条の青屋)」の墨書があり、イズメは、藁葺屋根の家の屋内の土間に置かれ、母親であろう傍らの女性が授乳する様子が描かれている。
- (20) 下坂守「中世「四条河原」考―描かれた「四てうのあおや」をめぐる―」(『中世寺院社会と民衆』思文閣出版、二〇一四年。初出は二〇〇九年)。
- (21) 中田祝夫・小林祥次郎「書言字考節用集の研究並びに索引」(『風間書房』、一九七三年)。「字彙」は、明の梅膺祚

が万曆四十三年（一六一五）に編集した漢字字典。

(22) 上笙一郎「ヘジコ」とその語源」（『日本児童史の開拓』小峰書店、一九八九年。初出は一九八二年）参照。なお、上氏も言及し、『角川古語大辞典』（角川書店）の「つぐら」の項にも記載される次の和歌がある。

山がつのつぐらにゐたるわれなれや心せばさをなげくと思へば

平安時代後期の歌人・源俊賴（一〇五五～一一二九）の自撰歌集『散木奇歌集』雑部上に所収される和歌である。口語訳すれば、

山賤（狛師やきこりなど）が住むような粗末な家の「つぐら」に居たときの自分だなあ。心の狭さを歎いて思ったのは。

となるであろうか。

ここに詠まれた「つぐら」が問題となる。「俚言集覽」（十九世紀初め）では、イズメと解釈して和歌を紹介している。『貞丈雑記』（十八世紀後半）は、「田舎にては、狭き家につぐらをしきてすむなり」とし、筵（敷き物）のようなものと解釈している。『散木奇歌集』の注釈書『散木弃調集標註』（序・一八五〇年）では、土をつきあげて床のようにした「土座」のことだという説を紹介する。仮に「つぐら」がイズメを指すとなると、十二世紀初めに「つぐら」と呼ばれるイズメが存在したことを示す突出して古い史料となり、イズメと理解することには躊躇する。つまり、和歌の意味は、「幼少期に」狭いつぐらに入っていた」ではなく、「狭い家のつぐらに座って暮らしていた」と解釈しておきたい。

関根慶子・古屋孝子『散木奇歌集 集注篇 下巻』（風間書房、一九九九年）参照。

(23) 岩手県中部で、近世末期から明治時代にかけて制作された「供養絵額」の多くにイズメが描かれていることを付言しておく。遠野市立博物館「供養絵額―残された家族の願い―」（遠野市立博物館、二〇〇一年）参照。

(24) 塚本学「江戸のみかん」（国立歴史民俗博物館研究報告 四、一九八四年）。

図版・写真の所載、転載元

図1・4 「紙本著色洛中洛外図屏風（歴博甲本）」国立歴史民俗博物館所蔵

図2 民俗学研究所編『日本民俗図録』（朝日新聞社、一九五五年）

- 図3 坪井洋文ほか『日本民俗文化大系 第10巻・家と女性』（小学館、一九八五年）
- 図5・6・7 「洛中洛外図屏風（復元模写）」東京大学史料編纂所蔵模写
（原本は、「洛中洛外図屏風（模本）」東京国立博物館所蔵）
- 図8・9・10 「上杉本洛中洛外図屏風」米沢市上杉博物館所蔵
『洛中洛外図大観・上杉家本』（小学館、一九八七年）
- 図11 愛知県美術館編『自然をめぐる千年の旅』（展覧会図録、二〇〇五年）
- 図12 須藤功編『写真でみる日本生活図引 第1巻・たがやす』（弘文堂、一九八八年）
- 図13 上原作和ほか編『かくや姫と絵巻の世界』（武蔵野書院、二〇一二年）
- 図14 『粉本稿』大館市立栗盛記念図書館「真崎文庫」所蔵
- 図16 「一遍上人絵伝（藤沢道場本）（模本）」東京国立博物館所蔵

（二〇二〇年十二月二十八日受理、二〇二二年一月九日採択）